

リアルタイムアタック

巖林

「起

自室の机の上に、紙が置いてあった。

『偶然を装い、見知らぬ少女と接触。後は成り行きで付き合って』

随分と酷い文章である。この紙がなぜ存在するかのかはだれも知らないがこの紙を受け取ったものは指示通りに動かなければ死ぬ、というのが世界レベルでの常識である。更に厄介なことに、この紙の内容を誰かに知られてはならないのである。というのには達成できなかった人間というのは死体を残さず足元から徐々に消え、昔のSF映画であったテレビポ

ートみたく最終的に頭のとっぺんまで消えてしまおうらしい。そして、一ヶ月程度でそれも存在したということが人々の記憶から抹消されるということらしい。全て伝聞調なのはその紙の研究をしていた人間が、遺族の追跡調査をしていたような跡があり、その記録が大体一ヶ月程度で調査が放り出されているから、らしい。

理不尽な紙の紹介は置いておき、その内容には頭を悩ませる。以前、幼馴染が届いた紙には、『幼馴染と絶交した後、昔遊んでいた空き地で殴り合いをして仲直りをする』とあり、そいつに唐突に殴られて絶交を宣言された後、妹が誘拐され、空き地に呼び出されて殴り合いをした。なんやかんやで仲直りした

後に、紙のことがばらされたから壮大なドツキリにひっかけられた気分だった。

そいつの件では幼馴染という特定しやすい人間が対象だからよかったもの、俺に対しては見知らぬ少女という不特定多数が該当する。そのうえで付き合うということは親密な関係になることを要求されている。いわばナンパをしろと解釈できるが、己の顔面を見る限りそれが成功するような面構えではない。ハダカデバネズミと一緒に写真を撮ったところで区別のつかないような面構えというのはこのような事態ではあまりにも不利なのである。

あれこれ考えているが策は思いつかず、脳ミソを眠気が支配する。時刻は3時を指していた。もしかすると今から断捨離やら遺品整

理を行ったほうがいいかもしれないと思いがら、眠りについた。

悩むという行為は人生において悪影響を及ぼす。悩んでいる最中に想定される懸念というのは大体悲観的であり、悲観的結果に終わってしまうことがおおい。現実として俺が電車を乗り継いで一時間かかる学校までの道のりを急がなければならぬのは、紙の内容に頭を悩ませていたせいで夜更かしになり、朝寝坊をしたからである。

駅を出たところで時計を確認すると始業のベルが鳴るまで後7分24秒、徒歩で行く間に合わないが走って息切れして汗まみれのみつともない姿で教室に入るには十分な時間である。

走りにくい制服のズボンに不快感を覚えながら、必死に足を動かし事故多発地帯として有名な丁字路が見えてきた。ここを右に曲がれば後は学校まで直進400メートル、しかし何もない閑静な住宅街を見下ろすように建てられた校舎の前には傾斜のキツイ坂道が俺の無遅刻無欠席を阻止するかの様にそびえ立っている。坂道がきついからと俺は止まるつもりはない。朝飯抜いてエネルギーに欠ける体を気合で動かし、丁字路をインコースで曲がった時だった。

鈍いドンという音と共に俺は吹き飛ばされた。肉体が宙に浮いていることが自覚できた。俺を吹き飛ばした人間は俺の通っている学校の制服を着けているが見知った顔ではなかった。相手の顔を認識するまでの間は世界

がスローモーションのごとく動いていたが、背中に走る痛みと共に現実世界に戻される。アスファルトに叩きつけられた体は途轍もなく重たい。

「ねえ、君、大丈夫？」

俺を吹き飛ばした張本人、ピンク髪の女生徒が俺のことをまじまじと見ながら言ってきた。

「いけない、遅刻しちゃう！」

女生徒は急いだ様子で、俺の返事を待たずに駅の方に向かっていった。

「おい、なぜ道路の上で寝ているんだ？おきろ」

優しくない言葉と共に俺を無理やり起こしたのは担任の柴田だった。筋肉隆々の2メートル越えの担任は平均的17歳の身長と体重

の値にほぼ同じ俺を片手で持ち上げると米俵のように担いでくれた。柴田はそのまま坂を駆け上がり教室まで運んでくれた。

「突然だが、このクラスに転入生が来ている」

柴田は教室に俺を運んだあと、職員室に戻ることなく教壇に立ち、そういった。

クラスがざわめくなか、入ってきたのは先程俺を吹き飛ばしたピンク髪の少女だった。

「初めまして、驥^{ハシ}譜^フ逕^{テイ}荳^{シュ}です」

そう名乗った少女の視線は俺の方を見ていた。

「そうだな、驥^{ハシ}譜^フ逕^{テイ}荳^{シュ}の席は……あいつの隣だな」

昨日まで誰かがいたような気がする隣の席はぼっかりと空いていた。

とりあえず、あいつとの衝突事故は『偶然を装い、見知らぬ少女と接触』という解釈でいいのだろうか？

「承」

うちの学校というのは週一回のペースで殺人事件が起きる。担任の柴田もこのクラス3人目の担任だし、クラスにいた阿刀田、飯島、宇山は六月くらいに殺された。犯人はクラスにいた渡辺でそいつ曰く、「出席取る時、最初に呼ばれたかった」と供述していたらしい。なので、どのクラスにも大体花瓶は置かれてるし花のこの学校を卒業した生徒の多くは花の手入れが完璧になるといふ専らの噂

だ（俺は仲良しの友人みんな生きてるので不
得意だ）。

本来、隣の席に座っていたのはテニス部の
主将で人気者の佐藤である。教室を見回して
もそいつはおらず、ただピンク髪が座って
るだけである。

「佐藤がいないけど、まさか休みか？」

柴田がしかめっ面で皆に尋ねる。クラスの
連中はまさかと思ひ、電話できる奴は佐藤に
連絡するが応答しない。

「柴田先生！俺、テニス部の部室に行つてき
ます！」

佐藤の幼馴染である太田が担任の返答を聞
かずに教室を出ていった。とりあえず教科書
の準備をして、太田を待っていると遠くから
サイレンの音が聞こえてきた。その音は徐々

に近くなり、太田が血相を変えて戻つてき
た。

「佐藤が……佐藤が……」

太田が泣き出した為、クラスの全員が事情
を察する。釣られて泣き出す奴も出てくる。

「自習！」

柴田の叫び声が虚しく響いた。

「驤トシ譜トシ逕トシ荳トシさんは、うちの学校の噂は
知ってる？」

異常な教室の雰囲気吞まれず、飄々とし
てるように見えるピンク髪に話しかける。

「ええ、勿論、でも……」

あまり感情のこもっていない返答と共にや
おら立ち上がると、彼女は胸ポケットから何
かを取り出した。

「この学校の事件は私が解決する！」

周りに見せびらかすように取り出したのは何かのバッチ。俺には見えないが、それを見た柴田が、「一緒に来てください」とわざわざ丁寧な言葉をして彼女と一緒に教室を出ていった。

二人と入れ替わるように、事情を説明する刑事さんが入ってきた。髪の毛が白髪交じりでぼさぼさ頭にサイズの合っていないダボつとしたレインコート、世間の禁煙化の波に対抗するような安い葉巻を啜えているおっさんである。

「えー、皆さん、察している通り佐藤君が部室で発見されました。なにか事情を知っている生徒さんいらしたらお願いできますか？」

特に誰も何も言わずに、泣いている生徒の嗚咽のみが聞こえている。刑事さんは頭を掻きながら更に付け加えた。

「仏さんのところにねえ、血文字があったんですよ。その文字がどうもこのクラスにいる人と一致するんですが、なにかこう諍いとか仲の悪い友人がいたとか、そんな情報でもいいですけどね」

それでも、誰も言わない。理由は簡単である。あまりにも事件が起きている為、ここにいる連中は犯人捜しを脳内で行っているのである。さらに言えば下手に何か証言すると重要参考人になったり、また己の推理を披露すると警察が公表していない情報と合致したりすることがあるので犯人扱いされるなど沈黙は金とばかりに悪いこと尽くしなのである。

俺は特にそんなことしない。それよりも

『紙』の内容について見知らぬ少女をあいつと仮定してどのようにして達成するかという問題の方が断然大事である。己の存在理由が消えてしまうのだから、殺人事件とはべつに生死を掛けた戦いをしているのだ。

「ところで、驥^{ウマ}譜^{ウマ}逕^{ウマ}^{ウマ}さんはいますか？ 二三、お伺いしたいことが……」

唐突に転校生の名前が出たことに、教室がざわめく。

「彼女なら、柴田先生と一緒に現場に行きました」

クラスの誰かが言うのと、刑事さんはしかめっ面で「ありがとう」といった上で、俺の方に指をさした。

「君も来てくれるかな？」

そのセリフとともに、制服を着けたお巡りさ

んが教室に二人やってきた。俺はとりあえず、手錠をかけられてクラスの連中の「今回の犯人は大穴だな」というありがたい言葉の背に受けてパトカーに乗せられた。

パトカーに乗ると、転校生も手錠を掛けられて乗っていた。

「あら、貴方も捕まったの？」

「生憎、あのメイ刑事さんの推理によると俺が犯人らしい」

ピンク髪が何か考え込むようなしぐさをしていた。

「探偵である私がなぜ捕まるのか……」

俺の知る限り探偵という職業が、警察の捜査に関与するのは小説や漫画の類の身であ

る。このピンク髪がそんなことで悩んでいるとしたら相当な危ない奴の気がしてきた。

「ねえ、あなた、私は犯人が太田君だと思うんだけど……」

「なんでそう思うんだよ？」

「現場をみれば一目瞭然。仰向けに倒れている人がダイイングメッセージなんて残せると思う？ 第一、テニスラケットに血糊がついているからってそれが凶器な訳ないじゃない」

「そうかい、俺は現場を見てないからなんとも言えない。」

俺にとっては佐藤の死より、重要なことがある。まずやることは、彼女にパートナーが居るかいにかである。

「所で、驥譜^{ウマ}逕^{ウチ}喜^{ウレシ}は彼氏とかいるのか？」

「その質問が今回の事件に関係あるの？」

勿論関係ない。しかし、俺には存亡がかわる問題なのである。重要なことは『紙』の内容を達成することである。その後のことは野となれ山となれである。

「じつは、俺も探偵なんだ。でも、俺の推理能力は特殊でガールフレンドがいないと発揮できないんだよ。恥を忍んで言うが、どうか事件解決の為に恋人になってくれないか？」

俺の意図不明の台詞に彼女は目を見開き、信じられないといった様子だった。

「確かに、探偵協会にその能力を持つ人が居たことは記憶してたけど、貴方だったとは……でもおすすめはしない。私の恋人はみんな事件の被害者になって亡くなったのよ。」

真実なら恐しいことを聞いてしまった。進むも地獄、退くも地獄となっている。

パトカー内だというのに目の前に紙が降りてきた。

『期日は後2ヶ月程度』

そう書かれた紙がおれの膝の上に乗った。

「その紙、どこから持ってきたの？」

驥譜^{ハシ}逕^マ荳^マが俺の膝覗き込んだ。

「結」

結局俺のいたクラスは卒業するまでに、残った生徒の数は十五人だった。様々な事件があったものの驥譜^{ハシ}逕^マ荳^マの推理によって解決。俺もその隣のワトソン役として死にかけながらも大いに奔走した。

気づけば、全体の六割がいなくなった卒業式で、平穩に卒業証書を受け取ると一気に歓声が上がった。この学校を卒業すること自体が難しい。卒業生の保護者他、遺族の方々が遺影を持って喪服で参加するのが伝統である。そして、卒業生には歓声を上げるのが習わしになっている。気恥ずかしさもありませんが、同じクラスの元仲間たちに焼香をあげながら校門をでると、証書筒を持ったピンク髪が俺のことを待っていた。

「ねえ、実は言わなきゃいけないことがあったの」

俺のガールフレンドは神妙な面持ちで、一枚の紙を取り出した。

「実は、貴方と最初ぶつかったのはこの紙のせいだったの」

その紙は俺がよく見慣れた、『紙』であった。

「私は、紙に従って様々な事件を解決した。その為には貴方が必要だったの。でも最後には……最後には……」

「それ以上言うな。紙の内容が他人に知られたら……」

「貴方を殺さないといけないの」

彼女は筒の中から短刀のようなものを取り出した。

「ごめんね」

彼女はその短刀を己の胸に突き刺した。

俺は引き抜こうとしたが、それがかえって死を早めることに気付いた。だから、手を握るしかなかった。

「さい……ご……ころし……たく……かつた」

途切れ途切れに聞こえる言葉、うまく聞き取れず頬に熱いものが流れ、ただただ、自分の手が赤く染まっていくことを眺めることしか出来なかった。

彼女の足が徐々に消えていく、握っている彼女の手はまだ温かい。周りには人だかりが出来ていた。

「俺も、俺も、『紙』の内容に従って、お前と付き合っただよ！」

その叫びに周りの人間がざわめき始める。

「あんた、そんなことを言ったら……」

その言葉の先は聞こえない。俺の体にも異変が生じていた。

彼女の体の下半身が無くなり、既に刺傷から血が溢れることは無くなっていった。

「いくら運命だからって、己の意思じゃなくても、お前のことが好きだったんだよ」

刺さっていたはずの短刀が宙に浮き、ぼろっと地面に落ちる。ついていたはずの血液は全くない、綺麗な刀身のままだった。

俺の体も消えていく。俺のことを世界の人が忘れたとしても、きっと俺は驥^ト諧^ト逕^ト喜^トのこと忘れない。

終

『転』

はい、どうも皆さんこんにちは、今日も元気にゲーム実況始めたいと思います。さて今回のゲームは「きらめき☆ラブリー青春マジエスティック★デイスティニーLOVEハート」。皆さんご存知、発売初日から評価が大荒れし、二日目には店舗買取拒否にされたといういわくつきにゲームです。このゲームの魅力というのはやっぱり、何一つゲームとしての面白さを持ってないということですね！恋愛ゲームだというのにヒロインが登場しないバグや登場してもゲームが進行できなくなる。また、ゲームデザインを間違えているのか、唐突にエンディングに行くなど、正規ルートでクリアした人間は一人もいないと噂のゲームです。そのあまりにもひどい内容に実

は凄いメッセージ性があるのではないかと考察する人々がでるなど、ゲーム本体以外のことで盛り上がりを見せているゲームの一つです。僕もその一人なんですけど。やっぱり何回やってもクリアできない。いきなりゲームが終了したり、見たこともないヒロインがウエディングドレスを着けて登場して、結婚して終わりなんてことがざらにあります。

更にこのゲームの魅力は如何に早くクリアまで、たどり着けるか？ということです。タイムアタックといわれるジャンルではかなり有名なんですよー。今回、私が動画を投稿する理由はですね、なんと、新たなバグを見つけて、今までの世界記録21分46秒を大幅に短縮して、10分台まで縮めることに成功しました！なのでね、その証明としてこの

実況で私が 世界一であること皆さんにお見せしたいと思います。勿論皆様も挑戦してもいいんですよ。

まず、主人公の名前ですが、一応デフォルトネームがあるんですけど、皆さん知ってるように、『紙』を見られても死なないようにするバグ『P S B』『paper skip bug』を利用するために主人公の名前は「俺」にします。これにより、主人公の紙が見られることによるバッドエンドを全て無くすことが出来ます。

次に難しいんですけど、紙の内容は実はランダムで決定するんですけど、それによって難易度が大幅に変わります。ですが、どうしても運頼みなどころはあるんですが、最初の紙を見た後、睡魔に襲われるまで、悩んだ

後、寝るを選択し、それに合わせてセーブをします。主人公が寝坊するイベントが起きれば、ヒロインが確定します。鈴木田中。みんなのトラウマ、すぎでんちゅうちゃんです。

はい、無事に寝坊しましたね。ここからは主人公である俺君を操作して学校に向かうんですけど、学校に向かうT字路ありますね、今まではここはあえて左に曲がらず右に行くことによって、柴田先生に遭遇、戦闘、敗北することで柴田先生が事件の被害者になることを防ぐことが重要とされてきました。

しかし、私が発見した新たな時間短縮ルールは敢えて左に選びその際に、壁に当たらないギリギリのインコースで曲がることにより鈴木さんとのイベントを起こして、その際に

「驥^ト諧^ト逕^ト亨^ト」と鈴木さんの名前が表示されれば成功です。初めて見る人はびっくりするかもしれませんが、これによって本来オドオドした性格の彼女の中に、探偵気取りの「オロトンド」ちゃんの性格が設定される通称「乗っ取り」バグを起こすことが出来ます。

はい、彼女は既に中身が別人なので、主人公にぶつかっただ後、事件を解決するために、駅に向かいますが、鈴木さんの登場フラグは既に立っているので彼女が転校生として紹介されます。矛盾しているとかそんなツツコミは野暮です。だってこのゲームだもん。

本来、鈴木さんは転校生初日に殺人犯扱いされて、クラスから孤立するんですけど、

「乗っ取り」バグにより、オロトンドちゃんルートで見られる刑事との現場検証のイベントと犯人の計略によってオロトンドちゃんが犯人として連行されるイベントを同時に行うことができます。これにより本来は太田が犯人である証拠を見つけるために必要な、主人公の母親が不倫しているところを目撃する、クラスで起きた「あいうえお殺人事件」の二つを解決した状態に出来ます。この二つのイベントを省略するのが私の発見した丁字路インコースバグです。

はい、無事連行されました。パトカー内で二人きりになれば後は知つての通り、会話の中で選択肢が現れますので一番でたらしめに思えるものを選択すると……はい紙が落ちて

きました。『PSB』の効果で死なないので自動的にエンディングまで進みます。

これで、主人公が焼香中に「あいうえお殺人事件」の犯人、渡辺が突如乱入、めった刺しにされると言うエンディングを迎えて今回の実況は終了です。ありがとうございますました。

あれ、なんだこの結末？ 初めて見るな、あれ、これ、もしかして、新たなルート発見？ だよね？ 鈴木さんルートはトラックに轢かれるエンドしかないはずだもんね。まじか、俺が新たなエンディング発見しちゃったよ。やっぱりこのゲームは奥が深い。では皆さんさようなら〜〜。

「NEW GAME」

自室の机の上に紙がおいてあった。